

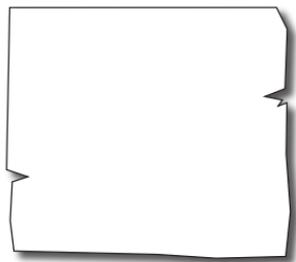
THE 7 FRAMES FOR All LIFE

# 7つのワクワク枠

## ふたりのコンパス①

### 第4フレーム

『Out』



『In』

木岬 さんぽ  
KIMISAKI SAMPO

# 僕は 飛び込んだ。

彼女<sup>るね</sup>瑠音、おじいさん…と支え合う  
思春期さんぽのフルーツフル青春物語

SAMPO FRUITS



## ふたりのコンパス①

『In Out』

プロローグ

72

そこは、あの岬<sup>みさき</sup>だった。

そこから見える海<sup>み</sup>の中<sup>うみ なか</sup>に、人<sup>ひと</sup>の姿<sup>すがた</sup>があった。

それは女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>——

高校<sup>こうこう</sup>で初<sup>はじ</sup>めて同<sup>おな</sup>じク<sup>こ</sup>ラスになっ<sup>こ</sup>た子<sup>こ</sup>——

それまで、ほとんど、あいさつ<sup>いがい</sup>以外<sup>ことば</sup>に言<sup>か</sup>葉<sup>か</sup>を交<sup>か</sup>わしたことがなかつた。

「おいでよお～！ 一<sup>いっしょ</sup>緒<sup>およ</sup>に泳<sup>か</sup>ごうよお～！」 彼<sup>かのじょ</sup>女<sup>た</sup>は立<sup>およ</sup>ち泳<sup>およ</sup>ぎしな  
がら僕<sup>ぼく</sup>に向<sup>む</sup>かっ<sup>あか</sup>て明<sup>う</sup>るく言<sup>うみ</sup>うと、海<sup>なか</sup>の中<sup>うみ</sup>をスイスイと泳<sup>およ</sup>ぎ始<sup>はじ</sup>めた。

水<sup>すい</sup>泳<sup>えい</sup>、得<sup>とく</sup>意<sup>い</sup>なんだ。

そのときだ。

「痛<sup>いた</sup>あーい！」と彼<sup>かのじょ</sup>女<sup>さけ</sup>の叫<sup>こえ</sup>ぶ声<sup>き</sup>が聞<sup>き</sup>こえた。

！！！！

波間で上下しながら苦しそうにしている様子が、明らかに見て取れた。——おぼれそうになっている!?

「ほら、助けに行かんか？」いつの間にか、側にいるおじいさん。

「——大丈夫。おまえさんなら、できる」 そう言った。

「できるって——一度おぼれた身だぜ？」と僕。

「自分を信じろ。おまえさんは、すぐれたライフセーバーじゃ。世界一のライフセーバーじゃ。彼女を余裕で助けることができる」おじいさんは、そう言い切った。

「——」 . . .

結局、——僕は飛び込んだ。

ザブン!

海の中に——。

## 73

そのときの僕は、海の中を華麗なクロールで泳ぎ——

彼女のそばにスムーズにたどり着くと、彼女を優しく抱え——

「もう、大丈夫だよ」 そう言葉をかけて、安心させた。

「あ、ありがとう——」 彼女は感謝した。

そうして落ち着きをとりもどした彼女に、僕の両肩に、背中側からつかまってもらいと、僕は、そのまま岸へ向かって泳ぎ始めた。

その見事なライフセーバーの働きぶりで彼女を助けているという状況が、うれしいインパクトを僕に与えつつあった。

そのときだ。

「あ、あれは何？」 彼女が不安そうな声を発した。

立ち泳ぎを始めながら、その視線の先を探ると――

20m くらい先に、大きな背びれらしきものが水面上に突き出ているのがわかった。

「もしかして―― サメ？」 彼女の不安そうな声。

「――え？ イ、イルカとかじゃない？」 と僕。

15m くらいに距離が縮んだ。

「こっちに近づいているね」と彼女。

「ああ」

「やっぱり、イルカなのかな？」

「――」 僕は背びれから遠ざかるべく、彼女につかまってもらいながら、急いで泳ぎ始めた。本能的に、そうすることに決めたのだ。

「ねえ、どうして逃げるの？」

「だって、サメかもしれないし――」

「え？ やっぱりサメなの！？」

彼女は僕に抱きついた。彼女のぬくもりが水着越しに背中伝わる――。 !!!

僕は必死に泳いだ。岸に向かって――。

けれど、背びれは、僕らを上回るスピードでぐんぐん近づいた。

なぜか、映画『ジョーズ』のテーマ曲が流れている――。

10m、7m、5m、3m……

「ああ！ もうすぐそこまで来ているわ！」

つかまる彼女の腕にも力が入る――。

僕は、あせりながらも、彼女を救うべく、彼女の盾になるようによく回りと向きを変え、彼女と背びれの間にいった。

100cm、70cm、50cm、30cm…

「イヤァー！」&「うおおー！」彼女と僕は、ほぼ同時に叫んだ。彼女は、これまで以上に強く僕に抱きついた。

「カ〜ット！」突然、誰かの大きな声が響き渡った。

見回すと、周囲が学校のプールに変わっていた。

え！？ いつの間に——

僕は足をプールの底につけた。何が何だかよくわからない——。

「はい、なかなかよろしい！ いい感じだったよ」その声の方を見ると、なんと映画監督の姿をしている岬のおじいさんがいた。

ええ！？

背びれの方を見ると——そこには、犬かきをしているランプベリーの姿があった。背びれの形のおもちゃのかぶりものを胴体に取りつけている——。

ランプベリー！・・・

ランプベリーはプールサイドに上がるとスタッフに背びれを取り外してもらい、それから、しっぽを振りながら、おじいさんのところへ駆け寄った。「よーし、よしよし、なかなかの名演技だったよ」

そう言いながら、おじいさんはランプベリーの体をタオルで拭いてあげている——。オレたちではなく、ランプベリー！？

大勢の人がプールサイドにいることに、僕らは気づいた。

彼女は抱きしめていた腕をほどくと、プールの底に足をつけた。

見ると、恥<sup>は</sup>ずかしそうに桃<sup>もいろ</sup>色<sup>かお</sup>の顔<sup>かお</sup>をうつむかせている――。

「よかったあ。無<sup>ぶ</sup>事<sup>じ</sup>で――」 彼女<sup>しんぞこ</sup>は心<sup>しん</sup>底<sup>ぞこ</sup>ホッとしたように、心<sup>こ</sup>笑<sup>え</sup>みながら言<sup>い</sup>った。――かと思<sup>おも</sup>うと、彼女<sup>かのじよ</sup>は気<sup>き</sup>を失<sup>う</sup>い、力<sup>ちから</sup>の抜<sup>ぬ</sup>けた体<sup>からだ</sup>を僕<sup>ぼく</sup>の方<sup>ほう</sup>に預<sup>あず</sup>けてきた。

「え？ 大<sup>だい</sup>丈<sup>じやう</sup>夫<sup>ぶ</sup>？ 大<sup>だい</sup>丈<sup>じやう</sup>夫<sup>ぶ</sup>？ 大<sup>だい</sup>丈<sup>じやう</sup>夫<sup>ぶ</sup>？ …」

## 74

パツと目<sup>め</sup>を<sup>あ</sup>開<sup>あ</sup>けた。

しばし呆<sup>ぼう</sup>然<sup>ぜん</sup>――。 . . .

おじいさんは昼<sup>ひる</sup>寝<sup>ね</sup>していた場<sup>ばしょ</sup>所<sup>しよ</sup>にいなかった。

立<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>がった僕<sup>ぼく</sup>は、辺<sup>あた</sup>り<sup>み</sup>を見<sup>み</sup>渡<sup>わた</sup>した。

すると――

「――おーい！ ここじゃあ～！」

よく目<sup>め</sup>を凝<sup>こ</sup>らすと、なんと、おじいさんは海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>にいたんだ。

!!!

釣<sup>つ</sup>りのウキのように、おじいさんの顔<sup>かお</sup>が見<sup>み</sup>え隠<sup>かく</sup>れしていた。

「若<sup>わか</sup>者<sup>もの</sup>よお～！ ――気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちがいいぞお～！ ――よっ」

「それより、大<sup>だい</sup>丈<sup>じやう</sup>夫<sup>ぶ</sup>かあ～！？ 無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>しないでくれよ～！」

「よゆうじゃ。よゆう！ ――ほっ。快<sup>かいて</sup>適<sup>き</sup>じゃあ！ ――はっ」

決<sup>け</sup>して、きれいな泳<sup>およ</sup>ぎとは言<sup>い</sup>えなかつたが、それなりに泳<sup>およ</sup>ぎを楽<sup>たの</sup>しんでいるように見<sup>み</sup>えたんだ。

## 75

「やはり、泳ぎは、一度、体で覚えてしまうと忘れんもんじゃの？」  
海から戻ってきたおじいさんは、そう言った——「ゲホッゲホッ。  
ゲホホッ」——あとにむせた。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫、大丈夫——。じゃが、終盤へばっちまってよ——  
もうちょっとで、おぼれてしまいそうになるところだったわい。  
アッハッハッ！ ゴホッ」

「——」　　！！！！

「わしゃあ、これでも——泳ぎの名手だったんじゃよ。若い頃か  
ら」おじいさんは、そう言いながら腰を下ろした。

「年を考えてくれよ。年を。それは若かりし過去の話なんだから」  
僕も腰を下ろした。「体力は、めっきり落ちているんだから。

——それに退院したばかりじゃん」

「グホッ。3本くらいとられた感じじゃの。アッハッハッ！」

「——」　　・・・

——ふいに僕の目は、ある一点に釘づけになった。おじいさんが  
抱える衣類の中に紛れて、濡れた、あの地図があったんだ。

音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて。

——音楽フェード・アウト

## 76

ひろ <sup>かわ</sup> 広げて乾かされている <sup>ちず</sup> 地図のそばで、ふたりで <sup>すわ</sup> 座って、はらかな  
すいへいせん <sup>なが</sup> 水平線を眺めていた。

そら <sup>ま</sup> 空を舞っているカモメたち——。

ポ——ッ テツテツテツ… <sup>とお</sup> <sup>すす</sup> 遠くへ進んでいる <sup>ふね</sup> 船——。

「それにしても、<sup>ちきゅう</sup> 地球ってさあ、でかいようで小さいよね？」と僕。

「ん？ なぜ、<sup>おも</sup> そう思うんじゃ？」

「だって—— ここで、こうして <sup>すいへいせん</sup> <sup>み</sup> 水平線を見ていると、“ああ、やっ  
<sup>ちきゅう</sup> <sup>まる</sup> ぱり地球って丸いんだなあ”って、<sup>かん</sup> そう感じるから。

——せいぜい、<sup>すうじゆう</sup> <sup>ほど</sup> <sup>たか</sup> <sup>み</sup> 数十メートル程の高さから見ているもだぜ？」

「おお、<sup>こた</sup> そうじゃのお」おじいさんが、しみじみと応えた。

「——アハッ。 <sup>じっさい</sup> 実際に、<sup>むじゅうりよく</sup> <sup>うちゅうせん</sup> <sup>なか</sup> <sup>ま</sup> <sup>まる</sup> フワフワ無重力の宇宙船の中から真ん丸い  
<sup>ちきゅう</sup> <sup>なが</sup> 地球を眺めたら、<sup>かんだう</sup> 感動ものだろうね？」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

「うむ。 <sup>あいだ</sup> そうじゃな」おじいさんは、そのまま、しばらくの間、  
<sup>とお</sup> <sup>なが</sup> 遠くを眺めた。それから、おじいさんは、<sup>くち</sup> <sup>ひら</sup> ふいに口を開いた。

「<sup>わかもの</sup> 若者よ——」

「——うん？」

「<sup>うちゅうじん</sup> 宇宙人は、<sup>おも</sup> いると思うかい？」

「は？ ——え？ いきなり、どうしたの？ SF <sup>せかい</sup> の世界ならまだし  
も。 ——え？ おいじいさんは、<sup>おも</sup> どう思っているの？」

「<sup>こた</sup> いるとも」あつさり答えた。

「どうして—— わかるの？」

「少なくとも、わしが宇宙人じゃからのお」

「ええっ!？」 言われてみれば・・・

「もちろん、おまえさんも宇宙人じゃ」

「は?」

「地球は、宇宙の中にある、宇宙の一部そのものじゃ。それはつまり、“地球人が宇宙人である”ということにほかならない」

「まあ、そりゃあ、そうかもしれないけれど——」・・・

「宇宙の中の地球が宇宙の一部そのものでもあるように、地球の中の地球人たちは、地球の一部そのものでもある。

その事実を見失い続けるならば、あつという間に地球人たちは絶滅してしまうじゃろう」

音楽急停止 ♪ Soaring Up Into The Sky

「——」・・・

「宇宙的な長い時間で見れば、地球人たちの生存期間は、まだまだ、ほんの一瞬にすぎないじゃろう。——どうなるんじゃろうかのお。地球人たちは——」

「——」・・・ 「——うん。どうなるんだろうね」

## 77

船は、さらに遠ざかり、水平線の彼方に消えていた。

空を舞っているカモメたちは、逆に岬に近づいていた。

「鳥たちは—— <sup>いっしょう</sup> 一生、<sup>うみ</sup> 海を泳ぐ<sup>およ</sup> 魚の<sup>きもち</sup> 気持ちが、<sup>わか</sup> わからないのじゃ  
ろうかのお？」とおじいさん。

「——まあ、ふつう、<sup>ぼく</sup> そうだろうね」と僕。

「うむ。それじゃあ、ペンギンたちは？」

「え？ ——ペンギンだったら、<sup>ていど</sup> ある程度わかるだろうね」

「うむ。——では、<sup>さかな</sup> 魚たちは、<sup>いっしょう</sup> 一生、<sup>そら</sup> 空を飛ぶ<sup>とり</sup> 鳥の<sup>きもち</sup> 気持ちがわから  
ないのじゃろうかのお？」

「ふつう、そうじゃない？ ——まあ、トビウオあたりなら、<sup>すこ</sup> 少しは、  
わかるだろうけど」

「うむ、そうじゃの」

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

おじいさんは、しばらく<sup>すいへいせん</sup> 水平線の<sup>かなた</sup> 彼方を<sup>なが</sup> 眺めていた。

かと思うと、<sup>おち</sup> 口を<sup>くち</sup> 開いた。

「<sup>わかもの</sup> 若者よ——」

「ん？」

「“<sup>ちきゅうじょう</sup> 地球上で暮らして<sup>く</sup> おる<sup>もの</sup> 者”と“<sup>うちゅう</sup> 宇宙から<sup>ちきゅう</sup> 地球を<sup>なが</sup> 眺めて<sup>もの</sup> おる<sup>もの</sup> 者”、  
——<sup>は</sup> 果たして、<sup>ちきゅう</sup> どちらが、<sup>み</sup> 地球をよく<sup>い</sup> 見ておると言えるじゃろう  
かな？」

「——<sup>うちゅう</sup> 宇宙から<sup>ちきゅう</sup> 地球を<sup>なが</sup> 眺めて<sup>ひと</sup> いる人？ だって、<sup>ちきゅう</sup> それで“地球が丸  
い”ってことが、より、はつきりわかるから」

「じゃが、<sup>ちきゅうじょう</sup> 地球上で暮らす<sup>く</sup> ことで<sup>はじ</sup> 初めて<sup>はじ</sup> わかることも、いろいろあ  
るじゃろ？」

・・・ 「——じゃあ、<sup>ちきゅうじょう</sup> 地球上で暮らしている人？」

「じゃが、<sup>とお</sup> 遠くに<sup>はな</sup> 離れな<sup>はな</sup> ぎや<sup>あ</sup> わから<sup>あ</sup> ないことも、あれこれある」

「じゃあ、どっちなの？」

「うむ。外へ離れて見ても、中に飛び込んで見ても、両方とも初めでわかることがあるってことじゃな。

それは——

海や空も同じ。学校や社会も同じ。

そして、誰かのライフも同じじゃ」

「——え？」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 78 へ続く

## 78

「おまえさん—— 今、好きな女の子は、おるじゃろうか？」 おじいさんは、ここぞというタイミングで僕に尋ねた。

「気になる子は、いるけど——」 素直に白状した。

「その子のこと、どう思う？」

「どう思うって——」

「じゃあ、女の子を、どう思う？」

「知らん。あいつら、それこそ異星人のような存在じゃないか？」

「じゃあ、気になる、その子のことは？」

・・・ 「——同じ？」

「若者よ」

「ん？」

「若者に、いろーんな者がおるように—— 年寄りにも、いろーん

ものがおる。男に、いろーんなヤツがおるように—— 女性にも、いろーんな方がおる。

それは、いろーんな鳥がいたり、いろーんな魚がいたりすることと同じじゃ」

「——」

「もちろん、性別、年代、所属…等の肩書きを知ることを含めて、遠くから眺めることで初めて見える何かも、きっと、あるじゃろう」

「——」

「じゃが、一方でな—— 表情を見せ合ったり、言葉を交わし合ったり、行動をともしたり…を含めて、相手と直接向き合うことで初めて見える何かも、たーくさん、あるんじゃ」

「——つまり、相手のライフの中に飛び込むことで初めて見える何かも、いっぱい、あるんだね？」

「うむ。そういうことじゃな。さすが若者じゃ。

——では、そろそろ、次のフレーム、第4フレームについて話そうかの」 おじいさんは、そう言いながら、ほとんど乾いている地図を手にとった。

それをゆつくりと裏返すと、口を開いた。

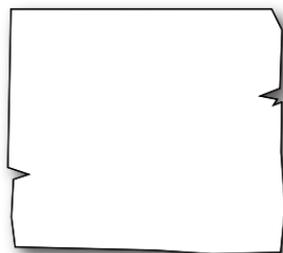
「——では、行くぞ？」

「ああ、さあ来い」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 78 へ続く

# 第4フレーム

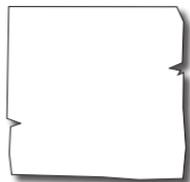
『Out』



『In』

## 79

『Out』



『In』

「『<sup>イン</sup>In <sup>アウト</sup>Out』じゃ」 そうい<sup>い</sup>ながら、おじい<sup>い</sup>さんは、紙<sup>かみ</sup>の下側<sup>したかわ</sup>と上側<sup>うえかわ</sup>を順番<sup>じゅんばん</sup>に指<sup>ゆび</sup>さした。

「英語<sup>えいご</sup>？」

「そうじゃとも。——インターナショナルじゃろ？」

「——。ああ、まあ——」・・・ 「じゃさあ、このフレームも、やっぱり、いろーんな“ライフのあり方<sup>かた</sup>”を教<sup>おし</sup>えてくれるの？」

「ああ、その通<sup>とお</sup>りじゃとも。——うむ。やっぱり、さすが若者<sup>わかもの</sup>じゃ」

「——」・・・

「では—— わしやあ、これから昼寝再開<sup>ひるねさいかい</sup>といこう。

——ちと、海水飲<sup>かいすい</sup>んじまったからのお。アッハッハッ！」

おじいさんは、そう言<sup>い</sup>って笑<sup>わら</sup>うと、ゆっくりと横<sup>よこ</sup>になった。

「——おじいちゃん、あんまり無理<sup>むり</sup>しないでくれよ？」

「ん？」

「例<sup>たと</sup>えば、魚<sup>さかな</sup>を食<sup>た</sup>べるときは、十<sup>じゅう</sup>分<sup>ぶん</sup>に注<sup>ちゅう</sup>意<sup>い</sup>してくれよ？」

「——。そうじゃな。——ありがとう」 おじいさんは、しみじみと言<sup>い</sup>うと、目<sup>め</sup>を閉<sup>と</sup>じた。——かと思<sup>おも</sup>うと、ふいに目<sup>め</sup>と口<sup>くち</sup>を開<sup>ひら</sup>いた。

「あつ、そうじゃ。岬<sup>みさき</sup>の、このあたりはな—— その昔<sup>むかし</sup>、わしが、好<sup>す</sup>きになった女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>と生ま<sup>う</sup>まれて初<sup>はじ</sup>めてキスした場<sup>ばしょ</sup>所<sup>しょ</sup>でもあるんじゃ。そして、なんと、その子<sup>こ</sup>が、将<sup>しょう</sup>来<sup>らい</sup>、わしのお嫁<sup>よめ</sup>さんにな<sup>な</sup>ってくれたんじゃ。

——まあ、とつても若<sup>わか</sup>かりしときの話<sup>はなし</sup>じゃがの。アッハッハッ！」

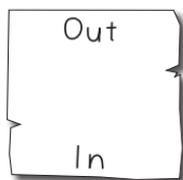
「——」・・・

音楽終了 ♪心地よき日々 Comfortable Days

## 80

いえ かせ ぼく 家に帰った僕は、さっそく、それを<sup>か</sup>書き<sup>こ</sup>込んだ。

「『In』と——『Out』と。——<sup>かん</sup>こんな感じ？」



さっそく、それを<sup>て</sup>手<sup>も</sup>に持った。

「キャハ！ こんにちはー♪」

「——」 ——ギョツ！？

コンパスの針<sup>はり</sup>の絵<sup>え</sup>が浮<sup>う</sup>かび上<sup>あ</sup>がると同時<sup>どうじ</sup>に聞<sup>き</sup>こえてきたのは、明<sup>あき</sup>らかに女性<sup>じよせい</sup>の聲<sup>こえ</sup>だったのだ。

「キャハハ！ ハジメマシテー♪」 その聲<sup>こえ</sup>は、明<sup>あか</sup>るくも<sup>あ</sup>あり、優<sup>やさ</sup>しくもあり、みずみずしくもあり… そして、かわいくて——

「は、は、<sup>はじ</sup>初めまして。こ、こんにちは」

——女<sup>おんな</sup>！？

キャハ！ そうでーす♪ 女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>でーす♪ キャハハ♡

<sup>おも</sup>思わず、ペーパー・コンパスを机<sup>つくえ</sup>の上<sup>うえ</sup>に置<sup>お</sup>いた。

——マジかよ！？

## 81

それから、<sup>き</sup>気を取り直<sup>と</sup>すために、<sup>いっかい</sup>一階の<sup>だいごう</sup>台所で<sup>つめ</sup>グラスに<sup>みず</sup>冷たい水  
を<sup>そそ</sup>注ぎ、<sup>にかい</sup>二階の<sup>じぶん</sup>自分の<sup>へ</sup>部屋に<sup>もちかえ</sup>持ち帰った。<sup>ひとくち</sup>一口飲み、<sup>ひといき</sup>一息ついた。

そうして、<sup>い</sup>意を決して、——<sup>ぼく</sup>僕は<sup>と</sup>飛び<sup>こ</sup>込んだ。

ペーパー・コンパスの<sup>おんな</sup>女の<sup>こ</sup>子の<sup>なか</sup>ライフの<sup>なか</sup>中に——。

「<sup>きみ</sup>き、<sup>なまえ</sup>君の名前は、——<sup>なん</sup>な、<sup>なん</sup>何でっしょ？」と<sup>ぼく</sup>僕。

「<sup>きゃ</sup>キャハハ♪ <sup>わたし</sup>私の<sup>なまえ</sup>名前は、<sup>コンパリー</sup>コンパリーチェ♪

——<sup>なまえ</sup>あなたの<sup>なまえ</sup>名前は？」

「<sup>ぼく</sup>ぼ、<sup>ぼく</sup>僕は、<sup>な</sup>な、<sup>なつみ</sup>なつみさき、<sup>さんぼ</sup>さんぼ—— <sup>もう</sup>と申します」

「<sup>ナナツミ</sup>ナナツミサキ・<sup>サン</sup>サン——」

「——」・・・

「<sup>ナナツミ</sup>ナナツミサキ・<sup>サン</sup>サンは、<sup>いま</sup>今、<sup>なに</sup>何を<sup>な</sup>やっているの？」

「<sup>いま</sup>今、——<sup>こうこう</sup>高校<sup>いちねんせい</sup>一年生<sup>を</sup>をやっています」

「<sup>そう</sup>そう。ナナツミサキ・<sup>サン</sup>サンの<sup>しょうらい</sup>将来は、<sup>かん</sup>どんな<sup>かん</sup>感じ？」

「——<sup>ぼく</sup>ぼ、<sup>しょうらい</sup>僕は、<sup>しょうらい</sup>将来、<sup>フレーム</sup>フレーム・<sup>マスター</sup>マスター<sup>に</sup>になります<sup>かん</sup>感じです」

なんか、<sup>ことば</sup>さっきから<sup>ことば</sup>言葉が<sup>へん</sup>ヘン——

「<sup>きゃ</sup>キャハ♪ <sup>そう</sup>そうなのね。——<sup>なん</sup>どんな<sup>フレーム</sup>フレーム・<sup>マスター</sup>マスター<sup>に</sup>なる  
の？」と<sup>コンパリー</sup>コンパリーチェ。

「<sup>え</sup>え？ <sup>なん</sup>どんな<sup>って</sup>って——」・・・<sup>みず</sup>水を<sup>ひとくち</sup>一口<sup>の</sup>ゴクリと<sup>の</sup>飲み<sup>こ</sup>込んだ。

「<sup>じゃあ</sup>じゃあ、<sup>フレーム</sup>フレーム・<sup>マスター</sup>マスター<sup>に</sup>なって、——<sup>それで</sup>それで、<sup>どう</sup>どう<sup>する</sup>するの？」

「<sup>それで</sup>それで？ <sup>それで</sup>それで—— <sup>え</sup>えっと、<sup>だから</sup>だから—— <sup>その</sup>その<sup>へん</sup>へんは、<sup>まだ</sup>まだ、  
<sup>よく</sup>よく<sup>わから</sup>わからない<sup>けど</sup>けど、——<sup>おじい</sup>おじい<sup>ちゃん</sup>ちゃんの<sup>おも</sup>想いを<sup>ひ</sup>引き<sup>つ</sup>継ぐ<sup>ん</sup>だよ。

——<sup>そう</sup>そう！ <sup>フレーム</sup>フレーム・<sup>マスター</sup>マスター<sup>の</sup>中の<sup>なか</sup>フレーム・<sup>マスター</sup>マスターの

<sup>おも</sup>想い——」

「そう」

「——」・・・「——それだけ？」 おも たず ぼく  
思わず尋ねる僕。

「え？ “ソレダケ？” ——って？」

「ほかに、もつとない？ “えらいねえ”とか、“立派だねえ”とか、  
“すばらしいねえ”とか……」

「プッ」

「——」・・・「——べつ わら  
別に笑わなくたっていいじゃん」

「オナラが出たのでーす♪」

「——」・・・

しばし、ちんもく なが  
沈黙が流れた。

・・・ ——お、おんな こ  
女の子だろ？

——おんな こ  
女の子もオナラをするのよ♪

・・・ そりゃそうかもしれないけれど——

みず ひとくち の こ  
水を一口、ゆっくりと飲み込んだ。

「あれあれ？ もしかして、おんな こ  
女の子はしないと思っただとか？」

「——。 ——。 ——っていうか、ふつう“オナラ出ちゃったの”  
とかってい かた  
言い方するだろ？ ——“は  
恥じらい”ってやつ？」

「キャハハハイ♪」

「——」・・・ ——なにも の こ  
な、何者なんだ。この子——

フレーム・フォー・オール・ライフからう  
生まれた、コンパス・  
フォー・オール・ライフでーす♪

——コ、コンパスが、オナラする？

なん  
何てったって、べつめい  
別名“コンパス・オブ・オール・ライフ”だからね♪

・・・ 「——だから？」 みず ひとくち  
水を一口。

「だから、コンパス・オブ・オール・ライフだから——  
 オナラもするし、恋こいもするし、結婚けっこんもするし、〇〇〇〇もするし、  
 〇〇〇もするし… 子こどもも産うむんだよー♪」  
 「ブーッ！！！」 口くちの中なかの水みずが、全ぜん部ぶ、吹ふき出でた。

## 82

コンパリーチェを机つくえの上うえに置おいた僕ぼくは、よろよろと一階いっかいの台所だいどころへと  
 向むかった。

——調ちよう子しくるうよ。まったく——。

女おんなの子こだと思おもって、構かまえて損そんしたぜ。

——でも、ここみちくさで道草みちくさしているわけには、いかないんだ。

イン、アウト、イン、アウト！

うん。英えいご語ごでやったぞ。

in と out は、中なかと外そとって意い味みだ。

つまり——  

グラスの中	グラスの外
冷蔵庫 <small>れいぞうこ</small> の中	冷蔵庫 <small>れいぞうこ</small> の外
家 <small>いえ</small> の中	家 <small>いえ</small> の外

ってことでいいのだろうか？

・・・ ——だなにから何なに？ うーん——。 ・・・

その後ご、何なんとなく外がいしゅつ出しゅつしたくなっぼくた僕ぼくは、チャリンポ——自じてんしゃ転しゃ車しゃ  
 で散さん歩ぽすることにした。自じてんしゃ転しゃ車しゃに乗のると、気きまままにペダルをこいだ。

イン、アウト、イン、アウト、なかそと、なかそと…

ポストの中	なか	ポストの外	そと
公園の中	こうえん なか	公園の外	こうえん そと
噴水の中	ふんすい なか	噴水の外	ふんすい そと
アスレチック遊具の中	ゆうぐ なか	アスレチック遊具の外	ゆうぐ そと
森の中	もり なか	森の外	もり そと
枝や葉の中	えだ は なか	枝や葉の外	えだ は そと
鳥の巣の中	とり す なか	鳥の巣の外	とり す そと
水筒の中	すいとう なか	水筒の外	すいとう そと
口の中	くち なか	口の外	くち そと
お腹の中	なか なか	お腹の外	なか そと

公園に到着してから自転車を置いてしばらく歩いた僕は、木陰の  
ベンチに腰を下ろすと、家から持ってきた水筒の中の水を少しず  
つ飲み始めた。

音楽 ♪夏 Summer 83 に続く

## 83

公園の、やや離れた芝生の上を、小さな子がバランスを取りな  
がら、よちよち歩いているのに気づいた。

かわいいや。歩き始めて、間もないのだろうか？

そのときだ。その子が何かにつまずいて転んだ。

あっ！

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

「ウーン！」その子は、声をあげて泣いた。近くのベンチに座っていたお母さんが笑みを浮かべながら小走りに近づいていくと——子どもを抱きかかえて優しくリズムを取りながら、「痛かったねえ。よしよし、よしよし… 痛い痛い飛んでいけえ〜♪」と声をかけながら、痛みがどこかへ飛んでいくような仕草を何度も繰り返してあげた。

それでも、その子は、しばらく泣き声をあげるのを止めなかった。——かと思っていると、何が起こったのか、一瞬で泣き声から笑い声に切り替わった。

——えっ！？ 何があったの？

少し驚いた僕は、しばらく、ぼんやり思いめぐらせた。

そして——

・・・ ——あっ！ ひらめいた！？

人を見るとき——

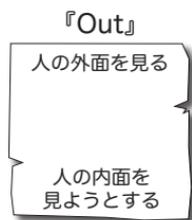
その人の“外見、ルックス、容姿、服装、顔の表情、行動、言動、姿勢、姿形、体形…”を見る人生もあれば、

その人の“中身、気持ち、思い、考え、思考、感覚、感情、心情、心…”を見ようとする人生もある。

つまり——

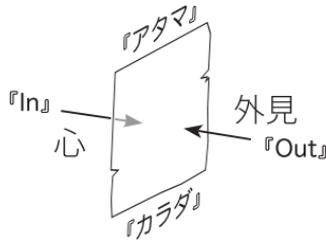
人の外面を見る人生が『Out』の方向にあるとすれば、人の内面を見ようとする人生が『In』の方向にある。

例えば、そんなプチ・マップも作れるだろう。



『In』

うん。そうすると、心こころとは、“頭あたまと体からだの両方りょうほうにおいて内側うちがわから  
キャッチしている対象たいしょう”なのだろう。



口くちに含ふくんだ水みずを、ゆっくり飲のみ込こんだ。

## 84

ふと、コンパリーチェのかんがことを考えた。

あのキャラ——

確かにたしに苦にが手てだけれど、まだアップグレードしていないから、今いまは  
奇妙きみょうで、おかしなことを話はなしているのかもしれないな。

——うん。ゆっくり長ながい目めで見みようかあ。

とおとはなはなに離はなれている分ぶん、相あ手てことを冷れい静せいに見みつめられる気きがした。

そのときだ。

——あ！ また、ひらめいた！？

例たとえば、自じ分ぶんを見みる人じん生せいが『In』の方ほう向こうにあるとすれば、自じ分ぶん以い  
外がいの誰だれかを見みる人じん生せいが『Out』の方ほう向こうにあるんじゃないか？

『Out』

(自分以外の)  
誰かを見る

自分を見る

『In』

そんな調子で——

あた 新しいプチ・マップの作り方が、次々と見つかった。

『In』

自分を見る  
 自分を信じる  
 自分を好きになる  
 自分のために  
 自分らしく  
 これは自分の言葉だ  
 これは自分の考えだ  
 自分の気持ちを見つめる  
 自分が、どう感ずるかを見つめる  
 自分が、どう思うかを見つめる  
 自分が、やりたいから  
 自分からすすんで  
 自ら(自由)  
 自分で見  
 自分で決める  
 自分でやる

『Out』

誰かを見る  
 誰かを信じる  
 誰かを好きになる  
 誰かのために  
 誰からしく  
 これは誰かの言葉だ  
 これは誰かの考えだ  
 誰かの気持ちを見つめる  
 誰かが、どう感ずるかを見つめる  
 誰かが、どう思うかを見つめる  
 誰かが、やってほしがるから  
 誰かにすすめられて  
 誰かから言われて(他由に?)  
 誰かに見てもら  
 誰かに決めてもら  
 誰かにやってもら

...

## 85

いえ こうこう い じてんしゃ ぶん  
家から高校まで行くには、自転車で30分くらいかった。

い しょうじかん かえ なが  
行きの所要時間は、帰りより長かった。

いえ こうこう む とちゅう なが のぼ ざか  
家から高校へ向かう途中に長い上り坂があったからだ。

さか いえ こうこう む しんぞうやぶ さか た  
その坂は、家から高校へ向かうときには、心臓破りの坂として立  
ちはだかり—— こうこう いえ かえ  
高校から家に帰るときには、ジェットコースター  
ざか せなか お  
坂として背中を押してくれた。

こうこう む とちゅう なが のぼ ざか ぼく こし う  
高校へ向かう途中の長い上り坂では、僕は、いつも、腰を浮かせ  
てペダルをこいだ。

なが のぼ ざか  
その長い上り坂のどこかには、たいてい、自転車を引いて歩く、  
ある じょしせいと すがた  
ある女子生徒の姿があった。

——それは夢にも出てきた彼女だった。

うし すがた  
後ろ姿だけでわかった。

ドキドキドキ… たかな こうどう  
高鳴る鼓動——。

かのじょ ぞんざい ないしん いしき かのじょ よこ とお  
彼女の存在を内心とても意識していても、いつも、彼女の横を通  
り過ぎながら、軽くあいさつするだけだった。

しず きんちよう しゅんかん  
静かな緊張の瞬間——

なんばい かん のうみつ じかん なが あいだ えいたんご あんき  
その何倍にも感じられた濃密な時間が流れる間、英単語の暗記は、  
かんぜん ちゅうだん  
完全に中断していた。

## 86

僕は、自転車通学の間<sup>じでんしゃつうがく あいだ</sup>に英語<sup>えいたんご</sup>を暗記<sup>あんき</sup>すること<sup>こと</sup>にしていた。

たとえば1日3個<sup>いちにち さんこ</sup>ずつであっても、毎日<sup>まいにち</sup>積み重ね<sup>かさ</sup>れば、相当<sup>そうとう</sup>な数<sup>かず</sup>に達<sup>たつ</sup>するだろうと見通<sup>みとお</sup>していた。

それは“将来<sup>しょうらい</sup>、大学<sup>だいがく</sup>に進学<sup>しんがく</sup>する”という漠然<sup>ぼくぜん</sup>とした目標<sup>もくりょう</sup>を達成<sup>たっせい</sup>するための取り組み<sup>とく</sup>の一環<sup>いつかん</sup>だった。

そもそも、なぜ大学<sup>だいがく</sup>に行こうと思<sup>い</sup>い始めた<sup>おも</sup>のか？

——ほかのみんなも大学<sup>だいがく</sup>を目指<sup>めざ</sup>していたから？

——とりわけ、彼女<sup>かのじょ</sup>も大学<sup>だいがく</sup>を目指<sup>めざ</sup>していたから？

いずれにせよ——

厳密<sup>げんみつ</sup>に言<sup>い</sup>えば、当時<sup>とうじ</sup>の僕<sup>ぼく</sup>は、勉強<sup>べんきょう</sup>していたのではなかった。

——勉強<sup>べんきょう</sup>させられていた。

当時<sup>とうじ</sup>の自分<sup>じぶん</sup>が体験<sup>たいけん</sup>していた高校生活<sup>こうこうせいかつ</sup>とは、“将来<sup>しょうらい</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>や目標<sup>もくりょう</sup>を明確<sup>めい</sup>にしながら育む<sup>かく</sup>機会<sup>きかい</sup>”からは程遠<sup>ほどとお</sup>く、基本的<sup>きほんてき</sup>に“目の前<sup>め</sup>のノルマ、目先<sup>めざき</sup>の課題<sup>かだい</sup>をこなす日々<sup>ひび</sup>”だった。

それが、実際<sup>じっさい</sup>に高校<sup>こうこう</sup>に入<sup>はい</sup>って初<sup>はじ</sup>めてわかつた現実<sup>げんじつ</sup>だった。

——あれ？

何<sup>なん</sup>のために高校<sup>こうこう</sup>に入<sup>はい</sup>ったんだっけ？

## 87

教室での休み時間—— 彼女は、よく読書をしていた。

僕の席から遠く離れた彼女の席で——。

まっすぐな、まなざし——

愛らしい横顔——

彼女は積極的にグループを作るタイプではなかったけれど——

初果陽 瑠音という名前から“ひるねちゃん”の愛称で呼ばれてい

て、クラスの人々に好かれていた。

ときに、話しかけられるひるねちゃん——。

はにかみがちな優しいしぐさ——

ときおりこぼれる笑顔——

に、ハッとする自分がいた。

一方、僕の席のひとつ前の席では、高校で初めて知り合っていた親友 井束 心笑君が、いろいろな科学雑誌をよく読んでいた。

数学や物理の成績が抜群で、ときに難解な数式だらけの本も読んでいた彼は、物理の授業中に先生に最初にそう呼ばれたことがきっかけとなって、“ニュートン君”の愛称で呼ばれていて、クラスの人々から一目置かれていた。

その名前に似合わず、めったに笑顔を見せない、まじめ君だった。

読み終えた科学雑誌を、僕に、よく読ませてくれた。

僕も自然科学に関心があったので、意気投合した。

僕が自然科学全般に関心があった一方で、彼は、特に物理学に関心があった。

## 88

高校生活では、それなりに勉強に取り組んでいたけれど——  
それなりに気分転換にも時間を割いていた。

定期試験が終了して開放感あふれる、夏休みが待ち遠しい時期の  
ある日、おじさんが春に入学祝としてプレゼントしてくれた使い古  
しの一眼レフカメラの存在をふと思い出した僕は、  
写真撮影を趣味にしてみよう。——そう決めた。

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky

チャリンポする先々で、気に入った被写体を見つけては、カシャ  
リカシャリとシャッターを切った。

朝顔のつぼみのみずみずしさ——

水平線の近くに浮かぶ、白い雲々と、そのあわい影——

木もれ日のまっすぐなライン——

樹木の周辺を駆け回るリスの一休み——

川面に夕陽の光が反射してできるキラキラ——

…

カメラは古くて、ズーム機能もオートフォーカス機能もなかった  
けれど、風景写真から接写写真まで、好きなように思うままに撮る  
ことができた。

この趣味の気分転換おかげで、勉強がはかどったのみならず——  
“『In Out』のプチ・マップ作り”がはかどりはじめた。

音楽 ♪ Soaring Up Into The Sky 89 に続く

## 89

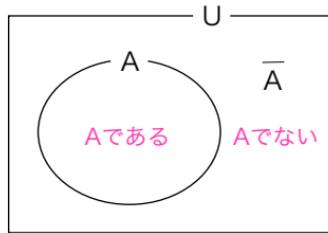
その日は、格別かくべつだった。

1校時は数学。

“集合”がテーマだった。

そのとき、“ド・モルガンの定理”よりも何よりも心惹かれたのは、  
であるが『In』の方向、でないが『Out』の方向にあるという気づき  
きだった。

図が、それを明確めいかくに示しめしていた。



ふーん。・・・

2校時は総合社会——歴史 & 地理。

歴史は“時代の流れ”について。

原始時代、古代、中世の時代、近世の時代、近代、現代。

——そして、未来の時代。

そのとき、“未来の時代”という発想よりも何よりも心惹かれ  
たのは、ある時代の中なかでが『In』の方向、ある時代から外はずれてが  
『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

ちり せかい きこう  
地理は世界の気候について。

ねったい うりん きこう きこう さぼく きこう ちゅうかいせい きこう おんだんしつ  
熱帯雨林気候、サバンナ気候、砂漠気候、地中海性気候、温暖湿  
じゆん きこう きこう  
潤気候、ツンドラ気候…

そのとき、“気候”が時代とともに変動するという発想よりも  
なに よりも ころひ かに せいかい ぞく ほうこう ある き  
何よりも心惹かれたのは、ある気候に属するが『In』の方向、ある気  
こう ぞく ほうこう ほうこう ある き  
候に属さないが『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

こうじ せいぶつ  
3校時は生物。

その日は、タマネギから採取した薄い皮を顕微鏡で観察してス  
ケッチを描く実習だった。

そのとき、“おお、生きてるぜ！”という印象をもたらした  
げんけいしつりゅうどう なに ころひ さいぼう なか  
“原形質流動”よりも何よりも心惹かれたのは、細胞の中が『In』  
ほうこう さいぼう そと ほうこう ほうこう ある き  
の方向、細胞の外が『Out』の方向にあるという気づきだった。

ふーん。・・・

ノりにノっていた。

こうじ たいいく すいえい む きょうしつ じゆん び あいだ  
4校時の体育の水泳へ向けて教室で準備する間も『In Out』の  
プチ・マップ作りづくに熱中し続けた。

プールの中が『In』の方向なら、プールの外が『Out』の方向か。  
プールに入るが『In』の方向なら、プールに入らないが『Out』  
ほうこう  
の方向——。 うーむ。・・・

——そう言えば、“out”と“not”って、どことなく似ているなあ。  
あっ、ou と no の部分は、互いに 180 度回転し合っているし——。

みずぎ も こういしつ む あいだ  
水着を持って更衣室に向かっている間も『In Out』のプチ・マッ  
づく ぼつとう つづ  
プ作りづくに没頭し続けた。

きょうしつ なか ほうこう  
教室の中が『In』の方向なら、

きょうしつ そと ほうこう  
教室の外が『Out』の方向——

いい てん き ほうこう  
いい天気であるが『In』の方向なら、

いい てん き ほうこう  
いい天気でないが『Out』の方向——

あつ ほうこう  
暑いが『In』の方向なら、

あつ ほうこう  
暑くないが『Out』の方向——

なか ほうこう  
トイレの中が『In』の方向なら、

トイレの そと ほうこう  
トイレの外が『Out』の方向——

なか ほうこう  
ポケットの中が『In』の方向なら、

ポケットの そと ほうこう  
ポケットの外が『Out』の方向——

たいいくかん なか ほうこう  
体育館の中が『In』の方向なら、

たいいくかん そと ほうこう  
体育館の外が『Out』の方向——

じかん ま あ ほうこう  
時間に間に合うが『In』の方向なら、

じかん ま あ ほうこう  
時間に間に合わないが『Out』の方向——

こういしつ なか ほうこう  
更衣室の中が『In』の方向なら、

更衣室の そと ほうこう  
更衣室の外が『Out』の方向——

げたばこ なか ほうこう  
下駄箱の中が『In』の方向なら、

げたばこ そと ほうこう  
下駄箱の外が『Out』の方向——

「きゃー！！」「見て見て」「えー、信じらんない！」…

いきなり、しゅうい そうぜん はじ  
いきなり、周囲が騒然とし始めた。

音楽 急停止 ♪ Soaring Up Into The Sky

「——」 え！？

われ かえ み あ  
我に返って見上げると、そこには——

ひょうげん うつく  
表現できない美しさの——

！！！！！！

そのとき初めて自分が女子更衣室の中なかにいることに気づいた。

——なぜ！？ ……

き とお なか だれ こえ き  
気が遠とのく中なかで、誰だれかの声こえが聞こえたような気がした。

「大丈夫だいじょうぶ？ 大丈夫だいじょうぶ？ 大丈夫だいじょうぶ？ …」

こうして、——僕ぼくは飛とび込こんだ。

レモンのように酸すっぱい未知みちのゾーンに——。

## 90

き  
気づいたら、保健室ほけんしつのベッドの上うへで横よこになっていた。

なに  
何なにがあったんだっけ？

——4校時こうじは体育たいいくの水泳すいえいだったはずだ。

きょうしつ いどう  
教室きょうしつから移動いどうして——

き  
気づいたら女子更衣室じょしこういしつに入はいっていて——

あのとき、あそこで、僕ぼくが見みたのは—— ……

——！！！！！！

あのあと、どうなったのだろう？

あのあと、いったい何が起きたのだろう？

．．．

——そうだ！　そもそも、夢だったんじゃないか？

うん、夢であれば問題ない。夢ならば、全くノープロブレムだ。

どうか夢でありますように——

．．．

## 91

上半身をゆっくり起こした僕は、意を決して、保健室にいた保健の先生に話しかけた。おずおずと——。

「あ、あの、先生——」

「あら、大丈夫？」

「あ、はい。——あ、あの、いったい何があったのでしょうか？

——それに、変な夢を見たようです」

「あら、よく覚えていないのね」

「——」　．．．

「——あなたは、女子更衣室で気を失って倒れちゃったのよ」

「——」　　!!!　現実？　．．．

「心ある有志が急いで私たちに知らせてくれて、それから担架を使ってあなたをここまで運んだのよ」

「——。——。す、すみませんでした。あ、あの、あのとき、僕は、イン、インア……」

「いんや？」

「あ、イエ、あの、<sup>かんが</sup>考えごとをしていて—— <sup>き</sup>気づいたら—— …」

<sup>ほけん</sup>保健の先生は、<sup>せんせい</sup>優しく <sup>やさ</sup>心 <sup>こゑ</sup>笑んだ。「大丈夫よ。それより、ゆっく  
り <sup>やす</sup>休みなさい」

「はい」 <sup>いさぎよ</sup> 潔く <sup>よこ</sup> 横になった。

——ズドドーン！！

とてつもなく <sup>おお</sup> 大きな <sup>なに</sup> 何かが <sup>くず</sup> 崩れ <sup>お</sup> 落ちるような <sup>かんかく</sup> 感覚に <sup>おそ</sup> 襲われた。

音楽イン ♪冬 Winter

こうして、わが <sup>づく</sup> プチ・マップ作りは、わが <sup>こい</sup> “恋のきざし” のとき  
めきを <sup>しつれん</sup> 失恋の <sup>いた</sup> 痛みへと <sup>いっぺん</sup> 一変させたのだ。

そりゃないぜ。

こんなに <sup>は</sup> 恥ずかしい <sup>じけん</sup> 事件は、<sup>かのじょ</sup> 彼女にも、<sup>まちが</sup> 間違いなく <sup>し</sup> 知られてし  
まったはずだ。

<sup>さいていさいあく</sup> 最低最悪だ。わが <sup>せいしゅん</sup> 青春は、おしまいだ。

——いや、それだけじゃない。

ウワサは、たちまち <sup>じゅう</sup> クラス中に、いや <sup>がっこうじゅう</sup> 学校中に <sup>ひろ</sup> 広がり、みんなは、  
そういう <sup>め</sup> 目で <sup>ぼく</sup> 僕を見る <sup>み</sup> だろう。

ああ、<sup>じんせい</sup> 人生、もうおしまいだ！

音楽 ♪冬 Winter 92 に続く

## 92

<sup>なつやす</sup> 夏休みが、<sup>ま</sup> どんなに <sup>どお</sup> 待ち遠しかっただろう。

何度、自分が消えてしまいたいと思っただろう。

まじめなニュートン君は、それでも、それとなく励まそうとしてくれたけれど、こちらは、何となく、きちんと接することができなくなってしまった。 ゴメンよ。こんな情けない僕で――。

その後、その悲しい現実から目を背けるかのようにして、勉強に燃えた。

これしか自分にはないんだ。自分で自分にそう言い聞かせた。

でも―― 目標もあいまいで結果も伴わない勉強が、次第にばからしいこと、くだらないことに思えてきて、気分転換であったはずのカメラの世界にのめり込んだ。

夏休みには、これまで見たことも聞いたこともないスポットを探し当てべく、地図とコンパスを頼りに自然の中へと飛び込んだ。

高原に咲く名も知らない花々の、鮮やかなレモン色――

小枝をしならず木の実たちの、みずみずしいストロベリー色――

静かな水辺に憩う水鳥の、透き通った白色――

川辺にたたずむイトトンボの、宝石のような青緑色――

豊かな枝のうねりを持つ巨木の、勇ましい茶褐色――

…

――こんなところに、こんなスポットがあったのか！

発見や感動の連続だった。

きっかけはどうかあれ、この“地図とコンパスを頼りに自然の中”に飛び込んだ経験は、『In Out』のプチ・マップ作りを深めるための、よいヒントになった。

## 93

「地図を広げて初めて見えることがある。

一方、地図が描く場所に実際に飛び込んで初め

て見えることもある。これは、地図を広げて見る人生が『Out』の

方向にあるとすれば、その場所に行って見る人生が『In』の方向に

あることに対応しているのさ！」

「キャハハハイ♪」

「似たような例は、ほかにもいろ

いろあるよ。例えば、“1枚の

葉っぱを見る人生か、1本の木を

見る人生か、1つの森を見る人生か”もそうだし——“個人を見る

人生か、社会を見る人生か”もそうだよ。

つまり——これらの例は、“ズーム・インして

見る人生か、ズーム・アウトして見る人生か”とい

う共通の意味を持っているのさ！」

「キャハハホイ♪」

「だから、地球、高校、誰かのライフ…との向き合い方も、本質的

に、ズーム・イン、ズーム・アウトの例と見なせるんだよ」



「キャハハホイホイホイ♪」

『Out』

地図を広げて見る

その場所に行って見る

『In』

『Out』

1つの森を見る

1本の木を見る

1枚の葉っぱを見る

『In』

『Out』

社会を見る

個人を見る

『In』

『Out』

ズーム・アウトして  
見るズーム・インして  
見る

『In』

94

「もちろん、ズーム・イン、ズーム・アウトの例は、ほかにもたくさんあるよ。

『In』

近くで、そばで見る

はっきりとした明確な目標

今、ここで、この人と…

特殊な話、例えば話

(瑠音さんは… 心笑君は… 例えば…)

具体的な言葉にする

(『ランベリー』『初果陽瑠音』

『井塚心笑』…)

詳細を見る

詳しく、細かく見る (finely)

顕微鏡で見る、ミクロの世界を見る

拡大して見る (400倍…)

のめり込んで見る

地球を見る

ローカルに見る

自分(僕、私、彼、彼女…)を見る

短期的に見る、短い目で見ると

自分のことを見る…

(秒・分単位で、時間単位で、日単位で…見る)

遠く離れて見る

漠然としたあいまいな目標

いつか、どこかで、誰かと…

一般的な話

(女の子は… 男は… 一般的に…)

抽象的な言葉にする

(『犬』『動物』『生き物』『人間』『恋人』

『親友』…)

アウトラインを見る

おおざっぱに見る (aboutに)

肉眼で見る、マクロの世界を見る

縮小して見る (1万分の1…)

ひいて見る

太陽系を見る (銀河系を見る)

グローバルに見る

自分たち(僕たち、私たち、みんな…)を見る

長期的に見る、長い目で見ると

先の先をも見すえる…

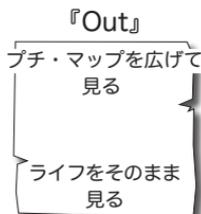
(月単位で、年単位で、万年単位で…見る)

『Out』

...

しかも、“プチ・マップを広げて見る人生か、  
ライフをそのまま見る人生か” 自体も、同じよ  
うな“ライフのあり方”の一例だったのさ

「キャハハハイ♪」



『In』

## 95

コスモスの花々が満開になる頃、ついに夏休みが明けた。  
それから間もない初秋の季節に、意外な事実を知った。

音楽イン ♪秋 Autumn

「女子更衣室で、君がたおれたとき、真っ先に先生に知らせてくれたのは、瑠音さんだったんだよ。水着姿のまま校舎内を走って」

「——」 ええっ?!

その“心ある有志”が、ほかならぬ瑠音さんであったことを教えてくれたのは、ニュートン君——心笑君だった。

「もしかしたら、もっと早く伝えるべきだったのかもしれないね。  
遅れてゴメンよ」

「ううん、とんでもないよ」

どうして、彼女が——・・・保健委員とかがだったっけ?

「一瞬——水着のまま廊下を小走りして保健室へと向かってきている彼女の姿が、心に浮かんだ。」

思わず首を振りながら、急いで意識から閉め出そうとした。

イカン、イカン!

——意外だった。

そういえば、夏休みに入る前も、あの毎朝の長い上り坂で、彼女は、あいさつをかわし続けてくれていたっけ——。

あの悲劇後に、こちらからのあいさつをためらっていたら、彼女の方からあいさつしてくれていたのだった。

ありがたかった。とても。

音楽 ♪秋 Autumn 96 に続く

## 96

それでも、悲劇のせいもあって勉強がはかどらないままに写真  
撮影にのめり込むことは、続いた。

日光に透ける紅葉の、赤や黄のハーモニー——

木の葉の合間から顔をのぞかせている、どんぐりの輝き——

初雪がもたらした、早朝の白銀の景色——

新雪を構成する、さまざまな形の雪の結晶——

クリスマスのイルミネーションの、幻想的な輝き——

...

と季節はめぐり——

さらに雪解けの頃のコンパリーチェとの一時的な別れを経て

山のくぼみにそってたたく残雪を染め上げる陽光のオレンジ——

土手に咲く小空花の、可憐なブルー——

春の光に透ける桜の花びらの、ういういしいピンク——

...

と季節はすすみ——

高校の新2年生へ向けてのクラス替えが発表となった。

僕は、溜音さんとは一緒のクラスとなったけれど、心笑君とは

別々のクラスになってしまった。

心笑君は、そのクラス発表の日に、『北の国から'87初恋』の再  
放送を録画したビデオテープをゆずってくれた。

「この間、『北の国から'89帰郷』で熱烈なファンになったって聞いていたから、準備していたんだ。クラスが別々になってしまったか

ら、なんだか<sup>せんべつ</sup>餞別みたいになってしまったけれど——」と<sup>こゝえくん</sup>心笑君。

「<sup>ほんとう</sup>本当に、いいのかい？」と<sup>ぼく</sup>僕。

「いいのさ。その方が、この<sup>ろくが</sup>録画ビデオも、きっと<sup>よろこ</sup>喜ぶよ」

「——それでは、ありがたく、ちょうだいするよ。うれしいなあ♪」

「<sup>べつべつ</sup>クラスは別々になってしまったけれど、これからも、よろしく」

「ああ、こちらこそ、よろしく」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

## 97

高校<sup>しょうか</sup>2年の初夏。

おじいさんに会うために<sup>あ</sup>岬へと<sup>みさき</sup>岬へと<sup>しゅっぽつ</sup>出発した。

カメラを<sup>も</sup>持って——

音楽イン♪ 夏 Summer

<sup>はなばな</sup>花々や<sup>ふく</sup>モンシロチョウたちを含む<sup>くだ</sup>下り<sup>こうぼいぜんたい</sup>勾配全体を—— カシャ！

——これがズーム・アウト。

<sup>ちか</sup>近づいて、おじいさんの<sup>えがお</sup>笑顔を—— カシャ！

——これがズーム・イン。

「アッハッハッ！ なんだか<sup>て</sup>照れるのお。カメラは——」

それから<sup>ぼく</sup>僕は、あの<sup>は</sup>恥ずかしい<sup>ひげき</sup>悲劇のことも<sup>ふく</sup>含めて、おじいさん  
にあれこれ<sup>はな</sup>話して<sup>き</sup>聞かせた。

「アハーツ、アハーツ、アッハッハッハッハッ！！ ——<sup>けっさく</sup>傑作じゃ！

アッハッハッハッ！！」 その“悲劇”を聞いたおじいさんは、涙をこぼしながら腹を抱えて笑った。

——こんなに笑うおじいさんを初めて見た。

「ある意味、ラッキーじゃったの？」

「ったく—— ふざけないでくれよ。

笑いごとじゃなくて致命傷だよ。イメージ最悪だし——」

「ん？ すまん、すまん。

じゃが、若者よ—— そういうもんじゃ。人生はカッコいいことばかりじゃない。そういう、どうしようもなくカッコ悪いこともありつつ人生は成り立つとる。

——心配いらん。

笑い飛ばせる 때가、いつかきつと来るはずじゃ

「——」 . . .

「わしなんか、もう、カッコ悪くて恥ずかしいことだらけじゃ。

それでも、これまで生きて。それでも、今、生きておる。

それでも、これからも生きるじゃろう。

人生は、いとおしいもんじゃて」

「——」

しばらく遠くを眺めていたおじいさんが、ポツリと口を開いた。

「彼女のこと、今も好きじゃろうか？」

. . . 「——ああ」

「うむ、そうか。

では、さっそく第5フレームを紹介しよう。きつと役立つはずじゃ」

「そうは言っても—— どうあがいても、かなわぬ恋だよ」

「まあ、その恋がかなうかどうかは、“ふたりの相性”の問題があるから、わしもようわからん。

じゃがのお—— これだけは、はっきり言える。

大きな大きな“人生の財産”をもたらししてくれるじゃろう。きつと」

「大きな大きな“人生の財産”——」

「そうじゃとも」

・・・ 「よくわからないけど——」 とりあえず、おじいさんに地図を手渡した。

「——うむ。では、行くぞ？」

「ああ、来い来い」

音楽♪ 夏 Summer 終了

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

ふたりのコンパス①

第4 フレーム

『In Out』

【完】